

紀 要

第10号

— 目 次 —

序	
縄文時代石器研究の方法論序説	(鈴木 康 二)
弥生社会からみた独鈷石	(田 井 中 洋 介)
犬上川左岸扇状地における考古学的研究	(近江歴史クラブ)
犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳群について	(北 原 治)
近江における階段式石室の検討	(堀 真 人)
犬上川左岸扇状地における無袖式横穴式石室	(辻 川 哲 朗)
古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地の古墳にみられる習俗の研究	(畑 中 英 二)
犬上川左岸扇状地における馬具副葬土壙墓について	(山 中 由 紀 子)
犬上川左岸扇状地における古墳出土の土器様相について	(中 村 智 孝)
犬上川左岸扇状地周辺の生産と流通の概観	(畑 中 英 二)
東大寺水沼荘の開発	(神 保 忠 宏・畑 中 英 二)
「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察	(重 岡 卓)
古代王権論にむけて	(細 川 修 平)
日野町出土の瓦器碗をめぐって	(土 垣 幸 徳)
滋賀県伊香郡高月町井口集落周辺の水利と環境	
井口城とその立地	(神 保 忠 宏)
水と環境教育	(佐 野 静 代)

1997. 3

(財)滋賀県文化財保護協会

古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓の問題点

— 犬上川左岸扇状地の資料を中心に —

畑 中 英 二

はじめに

今回検討対象とする犬上川左岸扇状地においては古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓が散見される。その在り方（立地や副葬品）からこれらの位置付けを試みたい。

1. 事例の検索

以下に、事例を検索して、概ね年代毎に記述を進めてきたい。年代観の根拠は当該地域の遺物をもとに構成した編年試案を用いている（「犬上川左岸扇状地における須恵器編年試案を参照のこと」）。

(1) 甲良町塚原古墳群土坑2ほか（文献38）

当該地域の中で（古墳時代後期から終末期の範疇の中で）最も年代的に遡る土壙墓は、現時点では、甲良町塚原古墳群内にみられる土坑2である。年代観としてはI段階古相であり概ね6世紀の中葉であろうと考えられる。ここでは鉄製品を含めて土器が副葬されているが、量的には杯蓋2点と杯身5点、壺が1点と比較的が多い。現時点で調査された塚原古墳群の中では古相の一群にはいるものであり、群構成の初期にあたるといってもよい。また、古墳群内に内包されているように立地している点に注目したい。この事例のほかに塚原古墳群内では更に時期は明確ではないものの2基の土壙墓が存在する。

(2) 甲良町小川原遺跡T1 SK2（文献33・第1図）

馬具が副葬されていた土壙墓として知られているものである。詳細な年代観について言及することは困難であるが、I段階の所産であるとして、概ね6世紀後半代から7世紀前半にかけてのものであると考えられる。ここでは、板状立聞素環鏡板付轡1個体と、柳葉形・平身形の鉄族が計5個体、須恵器の丸底壺と徳利型平底壺各1点が出土している。周辺に古墳などは存在せず、単独で立地している。

(3) 甲良町小川原遺跡T3 SK1（文献33）

I段階新相であることから、概ね7世紀前頃と考えられるものである。ここでは須恵器の杯身、杯蓋、

台付短頸壺が出土している。周辺に古墳などは存在せず、単独で立地する。

(4) 甲良町長畑遺跡（註1）

I段階新相であることから、概ね7世紀中葉頃と考えられるものである。ここでは、銀環1点と須恵器杯蓋、杯身各1点が出土している。周辺にはやや離れる（長畑遺跡）がこれより時期的に後出する方墳が確認されている（文献52）。

(5) 甲良町在北遺跡SK4（文献19）

II段階であることから、概ね7世紀第3四半期頃と考えられるものである。ここでは須恵器杯身、短頸壺が各1個体出土している。周辺には古墳などは存在せず、単独で立地する。

(6) 彦根市葛籠北古墳群（文献43）

概ね6世紀後半代から7世紀前半代にかけてのものである。

古墳群内に立地することが特徴であるが、更に当該古墳群は横穴式石室を導入しないことも大きな特徴の一つである。

2. 分析—類型化と類似資料の検索—

以上に検索した古墳時代後期から終末期にかけての土壙墓を滋賀県内の資料を用いて類型化し、当該地域における葬送墓制の一側面の位置付けを試みることにしたい。

(1) 資料の検索

(類型1) 単独で立地する土壙墓

単独で立地する土壙墓は滋賀県内では類例は極めて少ない。ここで取り上げた甲良町小川原遺跡などの4例に加えて、今津町日置前遺跡（文献63）等が挙げられる。集落と集落の間、若しくは古墳群と古墳群の間というような地点に立地するとみてよいだろう。

(類型2) 群集傾向にある土壙墓（土壙墓のみで構成）（第2図参照）

土壙墓が群集傾向を示すものも類例は極めて少ない。強いて挙げれば蒲生町木郷遺跡の事例（文献89）

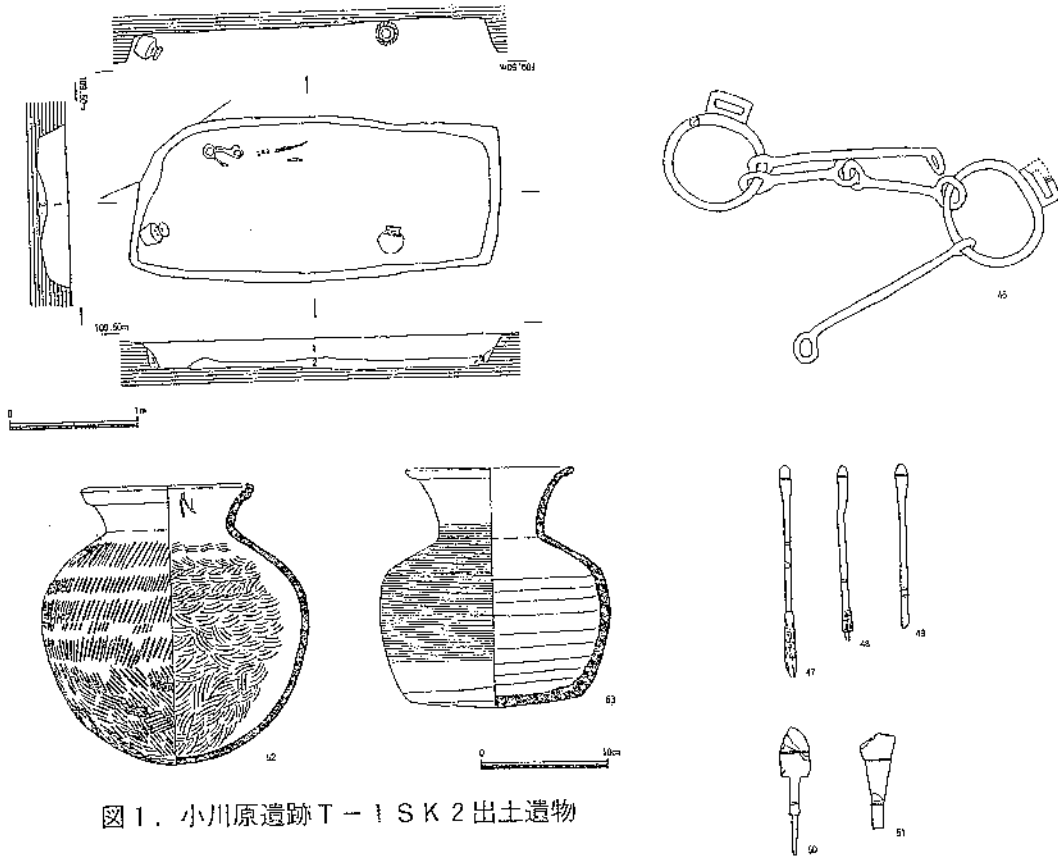


図1. 小川原遺跡T-1SK2出土遺物



図2. 野洲町夕日ヶ丘北遺跡

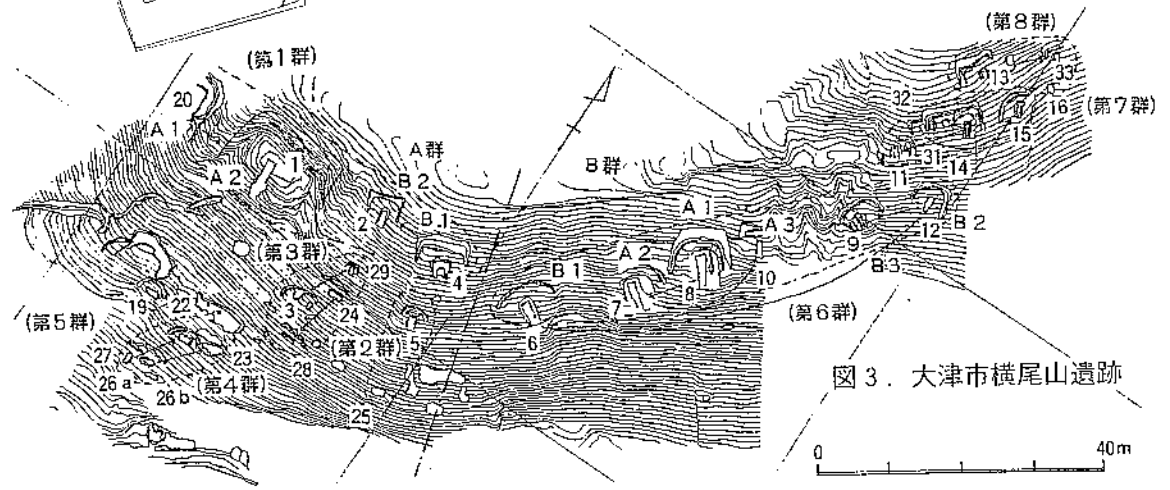


図3. 大津市横尾山遺跡

がそれに該当する。7世紀中葉頃のものから8世紀代のものまでの計7基が確認されている。副葬品は須恵器からなる土器類に加えて鉄鍬や刀子等の鉄製品も見られる。ただ、この事例は厳密には土壙墓であるとは言い切れない点をもっている。これらの土壙墓としたものの内、4基には焼土や灰、炭が検出されており、火化墓であると考えられている。

この他に群集傾向にある土壙墓を挙げるとするならば、野洲町夕日ヶ丘北遺跡の事例（文献87）がそれに該当する可能性をもっている。夕日ヶ丘北遺跡は6世紀代の滋賀県内最大規模の須恵器窯跡群である鏡山古窯址群に隣接する遺跡であるが、そこでは100基以上におよぶ土坑が確認されている。これらの遺構は上採り穴の可能性もあるが、同時に福永伸哉氏の提唱する「密集型土壙墓群」（文献172・173）である可能性も残されている。ともあれ、発掘調査の概要報告からそのいずれかを推し量ることは困難であることから厳密な意味での評価は保留したい。

（類型3）古墳群内に内包される土壙墓（第3図参照）

6世紀代の範疇で理解される古墳時代後期の事例は、先の検索で挙げた甲良町塚原古墳群、彦根市葛籠北古墳群の事例等が知られるのみでその他は寡聞にして知らない。ただ、7世紀代の範疇で理解される古墳時代終末期においては甲西町狐栗古墳群、大津市横尾山古墳群（文献66）、大津市太鼓塚古墳群等を挙げることができる。甲西町狐栗古墳群においては累代的に墳墓が築かれたようでその中で後半期に土壙墓が作られたとみられる。一方大津市横尾山古墳群においては7世紀代の時間幅の中で多様な墳墓形態がみられるが、必ずしも墳墓形態の差違は時間差を表現するものではなく集団若しくは個人の個性を表現しているとみられ、それぞれのパリエーションを持つ墳墓形態がブロックを形成していることが注目される。

古墳群内に内包される土壙墓については、更に幾つかの類型に分類する必要があるだろう。

（2）傾向の抽出と検討

以上に古墳時代後期から終末期にかけての滋賀県内の土壙墓の事例を検索した。その結果、大きく3つの類型に分類することが可能となった。犬上川左

岸地域においては古墳時代後期においては古墳群内に土壙墓を内包する事例があること、また、単独で存在する傾向にある土壙墓の存在が顕著であることの2点を指摘することができる。この状況は何を意味するのであろうか。一般的に多く見られる土坑墓のパターンは類型3に挙げた古墳群内に内包されるものでかつ、終末期にかけてのものである。個人若しくは集団の個性の表現として様々な墓制がとられていることを指摘することができるが、その他の事例については一般的に土坑墓が階層的に低いものとして捉えられることが多い。ただ、葬制の差を直接的に階層差に結びつけることが困難な事例が幾つか見られる。大阪府長原古墳群においては韓式系土器を伴うなど渡来系習俗の顕著に見られる副葬品が知られるが（時期的な問題はあるものの）、横穴式石室は基本的に導入されておらず、そのほとんどが木棺若しくは土器棺であったことが推測されている（文献95）。また、5世紀後半に朝鮮系軟質土器や陶質土器を伴う古墳の埋葬施設の多くが横穴式石室以外のものである点、または、奈良県寺口忍海古墳群（文献100）においては群構成初期の横穴式石室とほぼ同時期と考えられる時期に3基の小竪穴式石室が確認されている点、更に大阪府一須賀古墳群（文献97・162）においても時期不明の木棺直葬墳が確認されている点を踏まえると、渡来系氏族の中には日本列島に定着した後も故地の墓制をそのまま踏襲していた可能性が指摘されるのである（文献147）。このことから直接的に結び付けられるものではないが、甲良町塚原古墳群において群構成初期に土坑墓が見られる点はこの脈絡の中で理解することが出来るかもしれない。

更に、甲良町小川原遺跡T1・SK2の様で単独で立地するものの、豊富な副葬品を持つものがある。古墳並みともいえる副葬品を持つものの評価は如何なるものになるのだろうか。ここで直接的に明確な解答を出すことはできないが、階層性の表現方法として土坑墓が存在すると考えることは難しいように思われるのである。

以上の事例を用いて、土壙墓が階層的に低いものであるかどうかの検討を行なう必要がある。都出比呂志氏の提唱する前方後円墳体制論（文献144）の

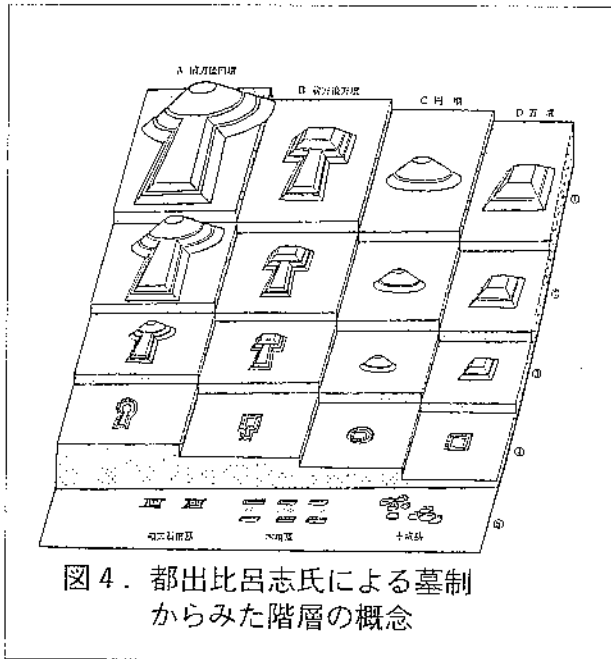


図4. 都出比呂志氏による墓制からみた階層の概念

中では土坑墓はやはり最低ランクの墓制であるとの位置付けがなされている（第4図参照）。当然、前述の福永氏の提唱する「密集型土坑墓群」が巨大な前方後円墳の対極にあるものであるとの認識の上に立つものである。ただ、福永氏の提唱する密集型土坑墓群は何れも窯業生産の盛んな地域でのみ検出される傾向が有り、やはり土採り穴である可能性を捨てることはできない。更には、科学的な根拠としての脂肪酸分析も読み取り方に問題があるのではないかとする意見がある（文献126）。また、都出比呂志氏の説く前方後円墳体制論の中での中核を成すのが実は部民制の問題であるとすれば、複層構造の支配体制をイメージするにも関わらず、単系列的なヒエラルヒーの中で墓制を理解するとい点において理解しがたい部分がある。確かに造墓にかかる労力は巨大な前方後円墳に比べて土坑墓は確かに小さいかもしれないが、土坑墓が階層的に低いものでなければならぬ、という根拠が実は脆弱である点を指摘しておきたい。

3. まとめ

犬上川左岸扇状地にて見られる土坑墓の資料を幾つか挙げて、古墳時代後期から終末期にかけての土坑墓の持つ問題点を提示することを試みた。やはり、問題となるのが前述したような都出比呂志氏の説く前方後円墳体制論（文献144）との関りを挙げるこ

とが出来ると（第4図参照）。また、犬上川左岸扇状地に位置する個々の土坑墓についての性格に言及する必要もあるだろう。その点について触れ、小稿のまとめとしたい。

これらのバリエーション豊かな犬上川左岸扇状地の古墳群は土坑墓の存在を一つの視点に加えることによって大きく4つに分けることが出来ると考える。まず、畿内系横穴式石室が卓越する檜崎古墳群以外は堅穴系横口式石室が主体となっていることから大きく2分することが出来るだろう。更に土坑墓を群構成の初期に導入する塚原古墳群とそれ以外のもの（北落古墳群、金屋古墳群、尼子古墳群）とを分けることが出来る。さらには小川原周辺の散発的に存在する土坑墓を一つのグループとして捉えることが出来るだろう。

現在知られている造墓時期の比較的古い一群として捉えられる塚原古墳群内の土坑墓の評価については、被葬者のもつ伝統的な墓制の表現とみると墓坑内への土器の副葬が見られる点などから、前述の長原古墳群例などの様に、在来倭人のものでない可能性を想定したい。時期的に後出する小川原周辺の土坑墓については消極的ではあるが塚原古墳群内の土坑墓の事例と同様の性格を帯びたもの（若しくはその系譜に連なるもの）を想定したい。何れにしても犬上川左岸扇状地で見られる古墳時代の土坑墓は、従来の研究の枠組みの中では十分に評価し得ない可能性があることは指摘できるのではないだろうか。

今回の検討は、筆者の怠慢もあり十分な事例の検索が出来ず、系譜関係などを明らかにすることが出来なかった。今後の資料の増加を待ちつつ、事例の検索を続けることによって古墳時代の土坑墓の評価を下すことが出来ると考える。故に、今回は問題点の提示に留めておきたい。

註

1・稲垣正宏氏の御教示による。

編 集 後 記

『紀要』の第10号をお届けいたします。

本号には多数の寄稿をいただいたため、紙幅の関係上、体裁を若干変えざるをえなくなりました。見にくい点等があらうかと思いますが、どうか御了承下さい。

さて、本号をもって、この『紀要』も10歳を迎える事になりました。ここに至る間には、多くの方々の御指導・御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。今後とも職員の研究活動の拠点として、さらに研鑽をつんでいきたいと考えておりますので、皆様からの積極的な御叱正・御鞭撻を賜りますよう、重ねてお願い申し上げます。

(T・M、T・T)

平成9年3月

紀 要 第10号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL:(0775-48-9780)

印刷・製本：明文舎印刷商事株式会社
滋賀県長浜市森町中久保386